現代短歌における意識的なあいまいさ

――「暁紅」の数首をめぐって――

栗林三千雄

短歌を鑑賞するとき、一番むずかしいのは、その短詩型という制約であろう。

語句のいみは、辞書をひけばしらべられる。文法上の問題は、用法を比較することによって考えることもできよう。しかし、そのようにしてもなお、その一首を理解したといえないような短歌作品は、けっしてすくなくない。それは、短歌が短詩型であるために、作者が、その表現で何をあらわそうとしたのか、その形だけでは、どうしてもわからないものがあるからである。

瓶にさす藤の花ぶさ短かければ畳の上にとどかざりけり

この歌は、語句の上からも文法上からも、わかりにくい点はない。しかし、この歌を鑑賞するためには、この作者が正岡子規であること、正岡子規がどのような人か、そしていつ、どのような時に、この歌が作られたかをしらないと、そのことばの意味はわかっても、真の鑑賞はしがたいであろう。

短歌は、抒情詩であって、表現のかげには必ず人間の感情が息づいている。それにもかかわらず、その表現が、いったいどのような感情を表わしているのか、三十一字の表現からだけでは、うかがいがたいものがある。とくに現代の短歌では、表現に制約された結果として、それがわかりにくいのではなくて、反ってその制約を逆に利用して、意識して切りすてたために、内容の理解を困難にしている部分があるからである。しかも、そのような短歌を鑑賞するのには、それについて考えてみないとわからない。

作者がわざとかくしている点をさぐらないと、鑑賞ができないというのでは、厄介なことになるのであるが、幸いにしてすぐれた作家には、多くの資料が公刊されていて、それを利用すれば、ある程度のことはわかってくる。ここにとりあげようとする斎藤茂吉も、その五十六巻という厖大な全集があることが、大きな手がかりとなっているのである。（注1）

斎藤茂吉の歌集「暁紅」の昭和十一年の歌に「映画中」ということばがきをもった次の二つの歌がある。

あきらけきふたつの眼副（まなこだぐ）へたるふたつの眉（まよ）を奈何（いか）にかもせむ

ほのぼのと清き眉根も歎きつつわれに言問ふとはの言問（注2）

この歌を「暁紅」のでたころ読んで、その生き生きとした感動にうたれて、学生のわたしは、自分もまねをして、映画の歌を作ってみた。いいなと思った映画なら二度三度みてもあきることのなかったその頃だったが、そうして作った歌には、自分で満足できるようなものは、ついになかった。

短歌のような作者に密着した作品では、映画のような間接的な経験を素材にしては、実感をだすことはむりなのだというような結論をつけてみたが、それでは、なぜ茂吉には、それができたのだろうか。

そのなぞが、今にしてとけたように思う。芸術においては、ものごとを正直にうけとるからいけない。疑いさえすれば、なぞはとけるのだ。この場合はそれが「映画中」であった。「映画中」ということばがきをとってしまえば、何でもないのだ。

それを、わたしに教えてくれたのは「茂吉の手帳から」という、杉浦明平氏の文章である。（注3）そしてこれからかくことは、氏のその文章の中にかかれていることのひきのばしといったようなものにすぎない。その点が、まことに残念なのだが、ただわたしとしては、わたしなりに書いてみたいという気をおさえることができないのである。

（注1　斎藤茂吉全集〔以下全集と省略〕　昭和27年――昭和32年　岩波書店刊・　注2　全集　第四巻　P246・　注3　現代短歌・茂吉文明以後　昭和34年　弘文堂刊）

いまわたしは、二首の歌のことばがき「映画中」はごまかしであるといった。それは、たしかにうそではない。うそではないだけに、ごまかされるのだ。

この「映画中」の二首は、歌集「暁紅」では「帰京」二首のあとに出ている。帰京というのは、かれが七月二十二日より箱根に行って、九月二日まで滞在していた、その箱根滞在よりの帰京である。だから、歌集の順序に従えば、この歌は九月二日以後に作られたように見える。

がしかし、他の資料によれば、そうではない。斎藤茂吉全集には、第四十三巻から四十五まで三巻にわたって、六十五冊のかれの手帳がおさめられている。その手帳三十七の中に、「映画哥」として

あきらけき二つの眼瞼へたる二つの眉を奈何にかもせむ

三ヶ月の清き眉根も歎きつつわれに言問ふとはの言問（注4）

の二首がのっている。かれが手帳に何でもかくくせのあったことは、茂吉自身のかいた『手帳の記』（注5）からもうかがいしることができるが、短歌のばあいには、手帳にかゝれている歌が当然公表以前の原形であったと考えられる。この手帳には、この二首の前に十一首、七月廿五日の歌があり、たてに線をひいて、映画哥として、この二首があり、また線で区ぎって、もう一首あって、七月二十六日と日づけを入れ、十七首の歌がつづいている。これからみれば、この二首の作られた月日は、九月にはいってからではなくて、七月廿五日でなければならない。

このように、歌集における歌の配列が事実と異なっているのは、たとえば、次の七月二十六日のことでもそうである。「暁紅」には「左千夫忌七月二十六日於アララギ発行所」と、ことばがきがあ

って、二首の歌がのっている。（注6）これだけによると、二十六日にアララギ発行所において、この二首は作られたように見える。しかし、七月二十六日には、すでにのべたように、茂吉は箱根にあって、東京にはいないのである。日記をしらべてみても、それは「今日は東京では左千夫忌哥会である。朝松田、女中みよ、甥、遥、喬等片桐同道来る。そこで僕は早雲山から大湧谷（涌）、湖尻まで乗合でゆき、湖尻から元箱根まで徒歩、小湧谷（涌）まで乗合、強羅迄電車で帰る。夜十時迄かかって哥十五首ばかり作る。併し碌な哥一つも無い。箱根は例年の事だから品切れの体であらう。」（注7）とあって、明らかである。

前日の二十五日も「朝から庭の雑草を刈る。汗出づ、それから哥少しづつ作る。ハガキと手紙とを処々の友人に書く。手紙二通とどく。午後強羅公園の方に散歩し哥三つばかり作る。帰って来て庭の雑草をぬき、入浴し、ニイチェを読む」（注8）となっていて、映画などは、見ていない。

歌集といえども、――いくら作者に密着した作品であっても、それはやはり創作作品であって、事実そのものではない。文学作品に事実を求めては、いけない。それは、いうまでもないが、短歌には、それを混同させるものがあって、ついだまされて、はっとなるのだ。しかも、それらはけっして、うそをいっているのではない。

七月廿六日に東京で左千夫忌歌会があったことが事実であるように、茂吉がこの二首の歌を作ったその映画を見たことも、事実であるにちがいない。では、それはいつであり、どんな映画だったのだろうか。

（注4　全集　第四十四巻　P.399・注5　全集　第三十一巻所収・注6　全集　第四巻　P.231・注7　全集　第四十八巻　P.395・注8　全集　第四十八巻　P.395）

さきにのべたように、茂吉が箱根に来たのは、七月廿二日である。日記によると、そのすぐ前、七月十七日と十九日に映画を見ている。しかし、十七日については「ソレカラ映画ヲ見、夕食ヲ簡単ニスマシテ帰宅ス。」（注9）とあり、十九日については「ソレヨリ渋谷ニ出テ、映画ヲ見、村田哥集の序哥ヲ考ヘ、夕食ニ鰻ヲ食シテ帰ル。」（注10）とあるだけで、映画の内容については、一言もふれていない。

もちろん、「映画哥」の二首が、十七日か十九日に見た映画に関係していなければならないというわけはない。そこで、その前を見てゆく。

七月二日に「夜新宿ムランニ行キタルニスデニ休ミカ。映画オモシロカラズ。」（注11）とある。六月にさかのぼると、二十九日に「夕方ヨリ渋谷ニ来リ映画ヲ見、鰻ヲ食シテカヘル。」（注12）二十五日に「夕方ヨリ外出シ、映画、鰻、九時半ニ帰リテ寝。」（注13）とあり、さらにさかのぼると、十九日に「武蔵〔野〕館、真珠盗賊ノ方ガオモシロカッタ。ムーランルウジュ。」（注14）とある。その三日まえ、十六日にも日比谷で映画を見ている。この日の日記になってはじめて「日比谷映画（青春ノ溜息ハ老翁ヲバ處女ガ恋スルトコロニテ、涙出ヅ）」（注15）という注目すべき感想を見出すことができる。一月あまりへだたっているが、この映画とさきの二首がむすびつくのではないだろうか。これは全く推測にすぎな

い。しかし、手がかりはないわけではない。

手帳の方の六月十六日ごろをしらべてみると、

六月十三日電気倶楽部（注16）

とある四行あとに、

たわたわとなりたる茱萸を身ぢかくにおきつつぞ見るそのくれなゐを

この茱萸を買ひもとめ来て夏の日を楽しみしより三年経にけり

あけみくろくなりつつ　おちくだつまで　蟲のむらがりおちすぐるまで／をさなごが飼ひゐる蛙ブリキの箱にしめりをあたふ／／螢ノたわたわと生りたるグミをけふぞ楽しむ／ゆふやみのひくき空より一つ螢はかすめて飛べり

おとろふるわれを慕ひてものをいふかなしきをとめまぢかくにを

る（注17）

という数首と断片がのっている。そして、その次には、

日本橋区ハマ町一ノ二、濱の屋――（山田孝雄先生、土屋文明、藤森朋夫、（支那料理）（久松町ノ停留場）濱の屋といふ待合アリ、注意スベシ。（注18）

とある。これを日記の方にあたってみると、六月十八日の記事に、

一（前略）十二時ニ日本橋濱町（久松町停留所〔原〕ノ向）濱の屋ト云フ支那料理店ニテ山田孝雄先生、土屋文明、西尾実、藤森朋夫ノ諸君ト会食、有益ニシテ愉快ナル会合ナリ。」（注19）というのがあり、それに相当すると思われる。そして、手帳では、この記事の十行ほどあとに、次の三首がある。

うみの風山こえて吹く国内には密柑の花はすでに咲くとぞ

さにづらふ玉の一つをめづるにもひそむがごとくありとこそいへ

おぼほしきくもりの中にあまつ日はいまこそは欲けめ見とも見えぬに（注20）

この第三首めの歌は、あきらかに日蝕を歌ったものである。日蝕は六月十九日であった。だから、このあたりがちょうど日比谷で映画を見たころに当たる。そして、

おとろふるわれを慕ひてものをいふかなしきをとめまぢかくにを

という、映画の「青春ノ溜息ハ老翁ヲバ處女ガ恋スルトコロニテ、涙出ヅ」に当たる歌が記されているのである。

（注9　全集　第四十八巻　P392・注10　全集　第四十八巻　P393・注11　全集　第四十八巻　P388・注12　全集　第四十八巻　P387・注13　全集　第四十八巻　P386・注14　全集　第四十八巻　P385・注15　全集　第四十八巻　P384・注16　全集　第四十四巻　P395・注17　全集　第四十四巻　P395・注18　全集　第四十四巻　P396・注19　全集　第四十八巻　P384・注20　全集　第四十四巻　P396）

「暁紅」へもどって、しらべてみると「一つ螢」六首（注21）の中には、「たわたわと」と「この茱萸を」と「海のかぜ」と「おぼほしき」の四首、それに断片の「ゆふやみのひくき空より一つ螢はかすめて飛べり」が推敲された形と思われる

ゆふ闇の空をとほりていづべなる水にかもゆく一つ螢は

の五首がのっているが、手帳にある

おとろふるわれを慕ひてものをいふかなしきをとめまぢかくにを

る

さにづらふ玉の一つをめづるにもひそむがごとくありとこそいへ
ひと嫉まむとおもひ悲しむ

の二首がおちている。（手帳にはおちていて「暁紅」にとられている、のこりの一首は日蝕を歌った歌である。）「短歌補遺」（注22）によれば、手帳三十七のこの二首のあとに、さらに次のような「暁紅」にはおちている歌がある。

をさなごの稚くなりてひと恋ふるかなしきこともなくなりにけり
あやしくも老のこころにめざめこしこほしき心きえゆくらしも
山いでてちまたをゆかばわが面を人こふる面と直ぐにしいはむ
松の樹に燈はさしてその奥処真くらき闇にうつりてゐたり
街角に立ちつくしたる真少女をいつの日といはじ忘れか行かむ
ほのぼのに夢かとぞおもふまをとめをいぶきと共に現ならしむ

（注23）

ではこれらの歌が、なぜ「暁紅」にとられなかったのだろうか。一つまり、いいかえれば、公表されることなしに埋もれさせてしまったのだろうか。そのひとつの理由は、推敲の途中ですてられたのだろう。

たとえば、補遺にものっていない

くらきときむちがり鳴きし蟬のこゑ明けはなるれば歎へりにけり

（注24）

の歌は、七月二十三日につくった五首の中の一つであるが、はっきりと手帳に「棄ツ」と記されている。だが、他の歌もみな、そうであろうか。

六月十六日の日記を、こゝでもう一度考えてみよう。その日の全文をあげる。

一六月十六日　旧四月廿七日　火曜　晴

午前中診察ニ従事ス。洋画家遠藤氏、清水先生紹介ノ不眠症ノ人。竹内、山中範太郎、大橋松平（大橋君ハ満鉄ノ請待ニテ三週間満州ニ旅行スルヨシ也）ノ諸君、午食セシハ二時半ナリ。餘リ疲レタカラ、参道ヲ散歩シオモヒタッテ日比谷ニ来リ、日比谷映画（青春ノ溜息ハ老翁ヲバ處女ガ恋スルトコロニテ、涙出ヅ）日本劇場、ヴァリエテヨシ。そばを大イソギデ食ヒ、約束アリシタメ帰宅シテ広野三郎君ノ哥ヲミル。山口君、佐藤君来ル。人麿校正刷ヲミル。十一時半」（注25）

なぜ、五十五才の茂吉は「老翁ヲバ処女ガ恋スルトコロニテ」涙をながしたのか。そしてまたさらに、それを日記に記したのか。これに、さらに、さきの手帳三十七の歌がかさなる。

おとろふるわれを慰ひてものをいふかなしきをとめまぢかくにを

この歌は、いったい映画のことなのか、茂吉の現実なのであろうか。それがもし現実にかかわりがなければ、なぜこの歌を、そして、この歌につづく「さにづらふ」「あやしくも」「山いでて」「街角に」「ほのぼのと」の歌を作り、またそれを作りつつ、公表しなかったのだろうか。

だから逆に、現実にかかわりがあったのだと考えて、それが納得できるのである。

（注21　全集　第四巻　P225・注22　全集　第五十六巻所収・注23　全集　第五十六巻　P94～P95・注24　全集　第四十四巻　P398・注25　全集　第四十八巻　P384）

「茂吉の手帳から」（注26）によると、手帳三十七には、

「手にとるからにゆらぐ玉のを／志賀寺の聖人」

という一行が、前後の語句とかかわりなしに、ぽつんとかゝれてあって、この志賀寺の聖人の「手にとるからにゆらぐ玉のを」の歌は、老いたる恋の象徴だという。そして、次のようにつづけられている。

「わたしは、この一行にふれたとき、何かピンと感じるものがあった。こんな歌は美しい歌ではない。志賀寺の聖人の説話なども、つまらぬもので、特殊な興味をもつもの以外には、いまさら感興をひきおこすはずのないものだ。逆に、こういう句に注目したとしたら、何かそれに注目した人の心の中に、この説話または歌句によって共鳴をひきおこされるような何ものかが存するはずだ。」（注27）

そして、さきにあげた

をさなごの稚くなりてひと恋ふるかなしきこともなくなりにけり

あやしくも老のこころにめざめこしこほしき心きえゆくらしも

の二首について、こう言っている。

「『偶吟』という詞書はけっして無意味ではない。（この二首には「谿谷偶吟」ということばがきがついている。――栗林）ジャーナリストに題を与えられてひねりだしたものではなく、茂吉の心の中にあった感情がふと浮かんできて、ことばとなったということを意味しているのだから。

前の歌で茂吉は『ひと恋ふるかなしきこともなく』なったといっている。しかしそれが歌になって出てきたということは、恋うる心がなくなったのではない。その反対である。そういう感情は微妙であって、ほんとうに恋心が心を多少ともゆすぶらなかったら、思いつくことのできないという性質のものではなかろうか。

後の歌は、もっとはっきりしている。茂吉の中に恋しき心が目ざめたのだ。『消えゆくらしも』は、空間や時間のへだたりによって、その強さが弱まってゆくように感じているのであって、けっして消えてしまったのではない。五十五才の孤独な不幸な茂吉の心の中をば、たれか女性の姿が横切って、小波を立てたことが知られる。そしてさきの『志賀寺聖人』とは、自嘲または同情のことばであったことがわかる。」（注28）

（注26　現代短歌　茂吉文明以後「杉浦明平」所収・注27　現代短歌「杉浦」P147～P148・注28　現代短歌「杉浦」P148～P149）

さて、昭和十一年、五十五才の斎藤茂吉の現実の心の中に、あるひとりの処女がいたと考えて、かれの短歌をながめてゆくと、いろいろのことがわかってくる。

第一にかくされた歌が、全集の「短歌補遺」から見つけだされる。これらの歌がいま残っているのは、残るべきでなかったのに残ったのであって、もし、それらの手帳が、昭和六年の夏に失われた手帳（注29）のように失われて出てこなかったとするなら、その中の歌は、永久にかくされていたはずの歌である。それにしても、かれがその歌を作ったということは、処女にひかれる心をおさえようとしておさえきれなかったことを示しているが、しかし、一方ではその歌を人に見せなかったことは、その心を自分でおさえたことを示している。茂吉は、はじめからあきらめなければならないと感じ

てはいた。しかし、どうして、それがあきらめることができようか。その苦しみが、昭和十一年の秋の歌に、つよくあらわれている。

「暁紅」の「巻末記」の中に「本集には未発表の歌が幾首もあり、銚子の方へ旅した歌、木曾から白骨へ行った歌等で、雑誌等に発表せずに清書して置いたものである。」（注30）とある、その「木曾から白骨へ行った歌」の中に、次のような歌がある。

いたいたしき恋にもあるか山鳥のひとつは打たれ啼くこゑもなし（注31）

まをとめと寝覚めのとこに老の身はとどまる術のつひに無かりし（注32）

北空の曇りひらきて山二つとはの悲しみを見さけざらめや（注33）

うつせみのにほふをとめと山中に照りたらひたる紅葉とあはれ。（注34）

「いたいたしき恋」とか「まをとめ」とか「とはの悲しみ」とか「うつせみのにほふをとめ」には、特定の個人を想定して、はじめて、切実にその歌が心にしみてくるのではなかろうか。

更に「暁紅」を見たときは、かれの詠嘆の対象が漠然としていて、察しがたい「白骨温泉」の連作には、「短歌補遺」によって補えば、思いがけない場面が展かれてくる。

「白骨温泉　其一」の十三首中に、

熱いでて君は来らず秋山にむかひつつぞ居る日のくるるまで（注35）

という一首があるが、その「君」を察する何ものも前後にはなく、かれの旅行の行程（注36）から考えて、この君は、アララギの歌友のだれかのようにしか思われない。

しかし、いま「短歌補遺」及び、手帳三十九によって、この一首をはさむ次の二首が「暁紅」にはすてられていることを考えると、この君が、異性の君であることを疑うことはできない。前後の二首とは、こうである。

チャブ臺にあひむかひゐば言少くかたみに何をいひしならむか

二人にて谷まに下り歩きなば水のしぶきに濡れたりけむを（注37）

そうして考えるとき、

朝の茶の小つぶ梅の実われひとり寂しく食ひて種子を並べぬ（注38）

峡のみづしぶきをあげてもろ木々のいたいたしきまでに風はとほりぬ

木の葉みな落ちたる高樹川べより直に立てるを見おろす吾は

むら小鳥風のまにまに飛び過ぎて一時われは木の葉とおもひし

夕闇とくらめる谿に降りつづく雪は見えなくなりて行きたり（注39）

白き湯をいくたびも浴みこもりたるこの部屋いでてわれ行かむとす（注40）

などの歌にこめられている、苦しいまでに切ない思いを理解することができるのである。

（注29「アララギ」第四十六巻　第十号　斎藤茂吉追悼号の「追悼録四」の「第七回安居会と斎藤先生」（山田良春）に記されている・注30　全集　第四巻　P.303・注31　全集　第四巻　P.275・

注32　全集　第四巻　P276・注33　全集　第四巻　P277・注34　全集　第四巻　P286・注35　全集　第四巻　P286・注36　斎藤茂吉年譜〔全集第五十六巻所収〕によると、昭和十一年十月十五日に東京を立って、木曾福島で講演し、十八日飯田のアララギ歌会に出、翌日上諏訪に至り森山汀川と瀧温泉に遊び、二十一日単身白骨温泉に遊んで、二十三日東京に帰っている。・注37　全集　第四十四巻　P444・注38　全集　第四巻「白骨温泉　其一」・注39　全集　第四巻「白骨温泉　其二」・注40　全集　第四巻「白骨温泉　其三」）

とはいえ、日記をしらべてみても、それ以上のことは何もわからない。

十月二十一日　旧九月七日　水曜

朝瀧ノ湯ヲ立チ、森山汀川君ト共ニ上諏訪ニ来ル。正午過ギタリ。ソコデ蕎麦ヲ食ヒ、一人ニナリテ白骨温泉ニ向ヒ、自動車ヲ降リテカラ一時間バカリ（郵便脚夫ハ二十分）カヽッテ五時ニ白骨温泉ニ到着。湯元別館ニ投宿ス。夜晴ル。

十月二十二日　旧九月八日　木曜　雪、嵐

白骨温泉ニアリ。時雨。こがらし。嵐、吹雪。夜ニナリテ雪ツモル。寂シクテ奈何トモナシガタシ。一日三円二十銭、茶代一円、女中一円オク。

十月二十三日　旧九月九日　金曜　晴

朝空晴ル。白骨温泉ヲ朝十一時ニ立チ、十二時少シ前ニ自動車ニ乗ルトコロニツキ、澤渡、島々、松本。松本ヲ午後三時十四分発。新宿午後八時四十六分著。土屋文明、山口茂吉、大越、等出迎ス。家ニ帰リ寝タル処ニ、本郷岩田正道博士母堂逝去ノ電話アリ。直チニ本院ノ母上ニ通告ス。（注41）

ここにかゝれているのは、茂吉が白骨温泉にひとりで行ったこと、そこで終日無為にすごし、翌日帰宅したこと、やはりそれだけのことで、それから先は、何もわからないままである。たゞ、日記をさらに見てゆくと、こえて二十九日に、

……（前略）寂シキマヽニ郊外ヲ散歩ス。初冬ノ光身ニ応フ。僕ハ所詮孤独ナルベシ。特ニ婦女子ニ縁ナシ、今後トモソノツモリニテ生クベシ。夜眠薬ノム。月明、寒シ。「丁度一月ナリ」（傍点、傍線、かぎ、ともに原文のまゝ）（注42）

という記事があって、注目される。そして傍点を含む「寂シキマヽニ郊外ヲ散歩ス」も傍線を含む「僕ハ所詮孤独ナルベシ。特ニ婦女子ニ縁ナシ、今後トモソノツモリニテ生クベシ」も、今までのことから考えて、理解できる。たゞ、かぎにかこまれている「丁度一月ナリ」ということばは、それだけでは、何のことか、わからない。一つは、主語が省略されているためで、その主語をもし「きょうは」であると考えると、一月まえに何かがあったことになる。そして、それは当然「婦女子ニ縁」のあることにちがいないと考えてよいのではなかろうか。それを見てみよう。

ちょうど一月まえ、九月二十九日の日記には、

午前中診察ニ従事、候補者ノ女医来ル、ソシテ「父ガ名古屋ニ行ッテキマスカラ、帰ッテ来ナケレバワカリマセン」コレハ既ニ虚偽也。（後略）……（注43）

とある。これがその日の女性に関する記事である。その二日まえ二十七日の、女性に関係のある記事は、

……（前略）夜ニナッテ（二字削除）□□未亡人ガ来テ（二字削除）□□氏トノウワサガアッテ困ッタ話ヲシタ。（後略）……（注44）

であり、さらにその前の二十四日に

木會行ノ話ノ用意ハカドラズ、会員ヲ案内シテ亀戸普門院ノ左千夫先生ノ墓ニ詣ヅ。会員ハ松山ノ永井房子ニテ今東京ニキル。ソレカラ亀戸天神ニ詣デ、ソレヨリバスニテ浅草ニ行キ、映画ヲ見シム。妻ト秘書トカ云フ恋愛モノトアトハ探偵物ナリ。夜食鰻、八時十分帰宅入浴。山口茂吉君来ル。（注45）

という記事がある。この三つの記事の中の女性で、だれが、茂吉に「婦女子ニ縁ナシ」といわせ「丁度一月ナリ」と咏嘆させたのにふさわしい女性であったろうか。少し日はずれても、この第三の女性こそ、それではなかったろうか。

昭和十一年十月二十九日以後の日記をみてゆくと、そこに出てくる永井房子の記事によって、その想像が的をはずれていないことが証されるが、もはやそれを追求する紙数に乏しく、またいまのわたしの目的からいえば、もうすでに十分である。

（注41　全集　第四十八巻　P419～P420・注42　全集　第四十八巻　P421・注43　全集　第四十八巻　P413・注44　全集　第四十八巻　P413・注45　全集　第四十八巻　P412）

茂吉のその思いは、じつに注意ぶかくかくされている。

面よせてただ一樹なるくれなゐをしげしげ見たり友と吾とは（注46）

この「滝温泉より撮温泉」の一首は、注36によるかぎり、森山汀川と茂吉が、もみじに対している歌だが、手帳三十九をみれば、

おもよせてたゞ一木なるくれゐのもみぢに對ふわれは耻しも老いにけり
しぐれゐし

（注47）

とあって、「くれなゐのもみぢ」は、その処女の象徴であり、この歌は、その処女に対する老人茂吉の咏嘆である。この原歌の変更は、推敲というよりは韜晦であり、公表に対する顧慮といえよう。そのような顧慮は、すでに昭和十一年はじめに、手帳三十七のひとりゐてわれの心をいたはれるをとめがゆくへまもらせたまへの歌を、

（注48）

ひとりゐて吾の心をいたはれるをとめと云はば眼を瞠りなむ（注49）

と改めている点に、みとめることができる。

先にあげた

いたいたしき恋にもあるか山鳥のひとつは打たれ啼くこゑもなし

まをとめと寝覚めのとこに老の身はとどまる術のつひに無かりし

のように一般的な形で歌われたばあいは、「まをとめ」と「寝覚めのとこ」とがどう結びつくのか、「いたいたしき恋」が「山鳥」のうたれた時になぜ思い浮かべられたのか、第三者には、推察しがたい。そしてそれゆえにこそ公表されたのだろう。

歌集「暁紅」には、今あげた「ひとりゐて」の歌と別題のもとに収められている

東京駅に朝むらがりて降りて来る勤めをとめをわれはともしむ

（注50）

のような、特定の対象をもたないと思われる歌でも、それが手帳三十七には「ひとりゐて」の歌とならんで出ている、――つまりこの二首が一しょに作られたのではないかと考えられることから、（注51）その「勤めをとめ」のむれにまじって、ひとりの特定の「をとめ」が歩いているのを、かれが思い浮かべていたとすることも、可能ではないだろうか。

また、この歌の次の、

かの草野あはれなりけりをとめどのいぶきのごとく草か萌えなむ（注52）

の「をとめど」も、茂吉の脳裏には、はっきりとした面かげがあったのではなかったか。

最後にもう一つ、次のようにゆがめられたのも、やはり恋の歌とることができよう。

まをとめにちかづくごとくくれなゐの梅におも寄せ見らくしよしも（注53）

恋ひおもふをとめのごとくふふめりしくれなゐの梅をいかにかもせむ（注54）

これらの歌は、梅の歌ではない。その「をとめ」は、明らかに特定のひとりであり、梅はその象徴である。そう考えて、これら昭和十一年と十二年の二首の梅の歌にこめられた感情の差も、正しく理解できる。

（注46　全集　第四巻　P280・注47　全集　第四十四巻　P440
・注48　全集　第四十四巻　P374・注49　全集　第四巻　P221
・注50　全集　第四巻　P221・注51　全集　第四十四巻　P374
・注52　全集　第四巻　P221・注53　全集　第四巻　P217・
注54　全集　第四巻　P311（この歌はたゞし「寒雲」所収））

一般のかげには持殊があり、自然物は、人間、しかも特定の人間に象徴されるということは、芸術の成立を考えてみるとき、何のふしぎもないことではある。

ただこのような形で、年老いた茂吉が、かれの「をとめ」への思いを短歌に表わし、しかも、その多くを葬り去り、一般的なものにかくれた所に、――「新生」の島崎藤村や「蒲団」の田山花袋のようにふるまえなかった所に、かれの歌つくりであったかなしさが存在している。短歌のもつ「あはれ」は、結局そんなものなのである。

それはとにかくとして、芸術作品において、作者をしることは、その作品が、かれのどんな経験をもとにして生まれたかということをしることであって、作品の理解と研究のためには、どうしても欠くことのできないものである。このわずかの覚えがきが、作者研究の一助ともなれば、幸いである。

（62・11・3）

（広島市鯉城中学校教諭）